

ぬま
沼 E 遺跡 I

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第71集

2001

津山市教育委員会
津山市沼E遺跡発掘調査委員会

序

沼E遺跡は、津山弥生住居址群として古くから知られている沼遺跡の南に隣接する弥生時代中・後期の集落遺跡です。昭和52年にこの一角に宅地造成計画がもちあがり、津山市教育委員会では確認調査を実施いたしました。その結果、対象地に多数の住居跡や建物の跡が発見されたため、岡山県文化課とともに事業者に同地の保存を申い入れていただきましたが保存困難な状況となり、翌年岡山県教育委員会と津山市教育委員会で津山市沼E遺跡発掘調査委員会を共同して設立し、発掘調査を実施することといたしました。

発掘調査の結果、4軒の竪穴住居址と7棟の掘立柱建物跡等が発見され、このなかに今まで類例をみない特殊な建物跡も発見され注目を集めました。この成果の概要是、昭和54年刊行の『岡山県埋蔵文化財調査報告』9で既に公表されていますが、調査後長期間が経過し正式発掘調査報告書の刊行が待ち望まれていました。

諸般の事情により報告書の刊行が遅っていましたが、このたび岡山県教育委員会のご努力により刊行が実現されるはこびとなりましたことは、実に喜ばしい限りです。刊行にあたりまして、ご助力をいただきました関係各位にお礼を申し上げますとともに、発掘調査の実施にご協力をいただきました皆様にあらためてお礼申し上げます。

平成13年10月

津山市教育委員会
教育長 松尾 康義

例　　言

- 1 本書は、宅地造成事業に先立ち津山市沼E遺跡発掘調査委員会（委員長 福島祐一 津山市教育委員会教育長：当時）が、昭和53年10月30日から翌54年1月6日まで発掘調査を実施した、津山市沼E遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地番は、岡山県津山市沼字松山610番地の5他である。
なお、隣接地の南半は昭和55年に津山市教育委員会により発掘調査が実施され、調査報告書は「沼E遺跡Ⅱ」津山市埋蔵文化財発掘調査報告8集として、すでに昭和56年に刊行されている。遺跡としてはこの両者をあわせ、現在「沼E遺跡」と総称している。
- 2 調査に要した経費は、原則として事業者である有限会社「津証」が負担した。
- 3 津山市沼E遺跡発掘調査委員会は、本遺跡の調査のため岡山県教育委員会と津山市教育委員会が共同で設立したもので、事務局を津山市教育委員会におき、現地調査は岡山県教育庁文化課文化財保護主査（現くらしき作陽大学教授）河本 清・同文化財保護主事（現岡山県古代古備文化財センター調査第三課長）柳瀬昭彦が担当した。
- 4 本書の執筆は、第1章を河本 清・柳瀬昭彦、第2章の出土遺物を中山俊紀（現津山弥生の里文化財センター所長）、第2章の造構と第3章を柳瀬昭彦が扱い、その他の構成や全体編集については中山の助力のもとに柳瀬が行った。
- 5 遺構の実測・製図は主として河本と柳瀬が実施したが、安川豊史（現津山弥生の里文化財センター次長）のほか、国貞士也・奥 和之・近藤正友・光延稻道・森 潤・森広琢之等諸氏の協力を得た。
- 6 遺物の整理は津山市教育委員会が担当し、出土土器の実測・淨書は中山が、石庭丁の実測・淨書は行田裕美（現津山市教育委員会文化課主幹）が行った。なお、出土土器の復元は日笠月子氏による。
- 7 本調査にかかる出土遺物・図面類・写真等は、津山弥生の里文化財センターで保管している。

凡　　例

- 1 本書の図2「周辺の弥生遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（津山東部・橋）の一部を複製し、加筆して使用したものである。
- 2 遺構の番号は種類ごとに通しとし、また、遺物の番号は基本的には遺構出土遺物ごと（一部図ごと）に付した。
- 3 揭載図の方位は図1～3は真北、それ以外の遺構図は磁北である。なお、遺跡周辺の磁北は西偏約 $6^{\circ} 30'$ である。
- 4 本書に使用した標高は、海拔絶対高である。
- 5 揭載図の縮尺は、原則として竪穴住居・建物などの遺構 1／80、上器 1／4・石器 1／2、その他の位置図や遺構全体図などは、それぞれに標記している。

目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 はじめに.....	(河本 清・柳瀬昭彦)	1
第1節 調査にいたる経過	1	
第2節 立地と周辺の歴史環境	2	
第3節 調査組織と調査の経過	5	
第2章 遺構と遺物	(柳瀬昭彦・中山俊紀)	9
第1節 壺穴住居と出土遺物	9	
第2節 掘立柱建物址	15	
第3節 その他の遺構	18	
第4節 石庖丁とその他の上器	19	
第3章 まとめ	(柳瀬昭彦)	21

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図1 津山市位置図（約1/50万）	1
図2 周辺の弥生遺跡分布図（1/25,000）	2
図3 調査区位置図（1/5,000）	5
図4 遺構配置図（1/400）	6
図5 壺穴住居1 平・断面図	9
図6 壺穴住居1 出土土器<1>	10
図7 壺穴住居1 出土土器<2>	11
図8 壺穴住居2 平・断面図	12
図9 壺穴住居2 出土土器	12
図10 壺穴住居3 平・断面図	13
図11 壺穴住居3 出土土器	13

図12	竪穴住居4 平・断面図	14
図13	竪穴住居4 出土土器	14
図14	建物I 平・断面図	15
図15	建物II 平・断面図	16
図16	建物III 平・断面図	16
図17	建物IV 平・断面図	17
図18	建物V 平・断面図	17
図19	建物VI 平・断面図	18
図20	建物VII 平・断面図	18
図21	石庖丁とその他の土器	19
図22	沼E 遺跡 遺構全体図 (1/500)	20
図23	沼E 遺跡 集落の変遷 (1/1,000)	22
図24	沼E 遺跡と沼E 遺跡の遺構配置相関図 (1/4,000)	23

写真図版目次

- 図版1 - 1 遺構検出状況遠景（南南西上空から）<左上に沼遺跡の復元住居>
- 2 遺構配置遠景（南西上空から）
- 図版2 - 1 竪穴住居1 床面検出状況（南から）
- 2 竪穴住居1 床面炭化材（西から）
 - 3 竪穴住居1 床面長頭壺出土状態（北西から）
 - 4 竪穴住居1 床面精査作業風景（南から）
- 図版3 - 1 竪穴住居2 完掘状況（南から）
- 2 竪穴住居3 完掘状況（東から）
 - 3 竪穴住居4 完掘状況（西から）
- 図版4 - 1 竪穴住居4 床面遺物出土状態（西から）
- 2 建物I 柱穴5 検出状況（南から）
 - 3 建物II 検出状況（南から）<上>、同完掘状況（北から）<下>
- 図版5 - 1 建物II 完掘状況（北西から）
- 2 建物II・III 配置状況（西から）
 - 3 建物IV 完掘状況（南東から）
- 図版6 - 1 建物V 完掘状況（北から）<奥は竪穴住居1>
- 2 建物VI 完掘状況（西から）
 - 3 建物VII 完掘状況（南から）
- 図版7 竪穴住居1 出土土器
- 図版8 竪穴住居2・3・4 出土土器、その他の出土遺物

第1章 はじめに

第1節 発掘調査にいたる経過

津山市教育委員会は、昭和52年6月に神戸市のヒカリ商会から、津山市志戸部字池の奥463・3、同沼字松山610・5、同字松山610・4の土地2,243m²の宅地造成計画について、現地の文化財に関する取り扱いの照会を受けた。対象地は津山市指定文化財の沼弥生住居址群に隣接し、また周知の遺跡に含まれていたため、弥生集落跡が広がっている可能性が大きく、津山市教育委員会では現地の確認調査を実施した。対象地はかつて青年学校の敷地であったため大部分平坦で、基盤層がすでに露出している部分が多くを占めていた。このため、確認調査は露出部分の清掃を中心に行ったが、それでも竪穴住居址3軒、掘立柱建物1棟を発見した。

この結果をもって、その取扱いについて岡山県教育厅文化課と協議し、両者で事業者のヒカリ商会との保存協議に入った。しかし、当時のヒカリ商会の経営状態では現状保存は受け入れられず、平行線をたどるまま会社が経営不振に陥り、対象地の処分が緊急の課題となってきた。このため、岡山県教育厅文化課と津山市教育委員会で再協議を行い、その結果両者で「津山市沼E遺跡発掘調査委員会」を組織し、事前に発掘調査を実施することで対応することとした。

しかし、この間対象の土地はヒカリ商会から津山市南新座の有限会社津証へと売り渡されることとなり、発掘調査計画の対応もそのまま津証が引き継ぐこととなった。このため、昭和53年9月25日付けで津証から文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。

津山市沼E遺跡発掘調査委員会委員長 福島祐一（津山市教育委員会教育長：当時）と有限会社津証代表取締役 有元安雄は、昭和53年10月5日付けで「宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わし、同年10月30日から現地調査を実施した。

現地調査は、主として岡山県教育厅文化課文化財保護主任 河本 清、同文化財保護主任 柳瀬昭彦の両名が実施し、事務局は津山市教育委員会に置いて、事務処理を同社会教育課で対応することとなった。

なお、調査終了の時点で全景写真の撮影の必要が生じたが、中国電力津山電力所岡田文治氏の格別のお計らいで、ヘリコプターによる空中写真の撮影を実施していただいた。記して感謝の意を表したい。



図1 津山市位置図（約1/50万）



1. 沼E道跡 2. 沼道跡 3. 大田十二社道跡 4. 京免道跡 5. 竹ノ下道跡 6. 一丁田道跡
 7. 高橋谷道跡 8. 紫保井道跡 9. ビャコ谷道跡 10. 押入西道跡 11. 野介代道跡 12. 桃山道跡

図2 周辺の弥生遺跡分布図 (1/25,000)

第2節 立地と周辺の歴史環境

沼E遺跡は、中国山地から南へ延びる丘陵の末端が、津山市の中心部に向けて張り出す低丘陵基部の頂上にあたる海拔147～148m付近に占地する。遺跡の西には津山盆地を中心とする小平野が開け、丘陵裾部を宮川が南下して吉井川に至る。眼下の平地水田面からの比高差は、おむね40mほどである。当遺跡の北側に接する丘陵上には著名な沼弥生住居址群が存在し、両者は一連の遺跡であったとみることができる。また、かつて当丘陵の西側から枝分かれした低丘陵が、谷を挟んで南北方向に存在していたが、現在国立津山高等専門学校敷地となっているその丘陵の一部にも造成前に數か所の弥生土器の散布が知られていて、当遺跡と同様な集落跡が存在していたと考えられる。その詳細は不明ながら、弥生時代の集落を評価する上では、それらも一体のものとして考慮する必要があろう。

弥生時代前期土器が認められているのは、現在のところ宮川右岸の高橋谷（一丁目）遺跡と同左岸の京免遺跡の2か所に限られる。前者は前期に属するとみられる土器・石器の量が多く、かつそれらに時間的幅が看取されるのに対し、後者は出土土器が一時期に限定され、小土坑が発見されたとはいえ遺物量も少ない。また、前者では後続の中期前葉の土器も多く発見され、中期また後期へと継続されているが、後者には中期前葉の上器が欠ける。これらのことから、両遺跡には集落の性格としては大きな隔たりがあると考えられ、高橋谷遺跡は弥生時代を通じての母集団の一つであり、京免弥生前期遺跡は一時の集落であると評価するのが妥当であろう。

この周辺で弥生集落が多くみられるのは中期中葉からで、京免遺跡・竹ノ下遺跡・繩保井遺跡・沼E遺跡などの例が知られる。これらの立地には河岸段丘や谷奥の丘陵上といった変異があるが、遺跡の性格としては一般的に中期中葉から後葉あるいは後期へと継続するものが多く、比較的生産基盤が安定した集落であったとの評価が下せよう。また、これらとやや性格を異にし、中期後葉にも新規の集落が出現するが、それらは上器様式にみる限りでは存続期間が短く、短廻廃絶型ともいべき様相を示す。そして、弥生遺跡数は中期後葉をピークとするが、それはこの短廻廃絶型の集落の増加に負うところが大きい。同時に、これらの集落は水田耕作に不利な部分に位置するものが多く、これらの例にはビシャコ谷遺跡・押入西遺跡・野介代遺跡などがある。

一方、弥生後期にも新規集落が出現するが、それらは後期を通じて存続し平地水田を見下ろす丘陵の端部に立地するものが多い。大田十二社遺跡や内山遺跡がその例として上げられる。これらは、中心集落に対応した衛星的集落の性格が強いとみてよい。

そのほか、弥生時代の墓地遺跡としては、竹ノ下遺跡・京免遺跡・沼E遺跡等の中期から後期前半にかけての小墓群が知られる一方、後期では下道山遺跡・櫻現山遺跡・上原遺跡等で集落と分離した形の大墓群が存在する。そして、いずれも木棺墓を主体とし、後者ではかつ特殊器台が発見されている点は、これらの集団が吉備の南部勢力と埋葬祭式を共有する新たな関係を構築してきたことを示唆するものであろう。

参考文献

- 近藤義郎・浜谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」津山市・津山郷土館 1957年
近藤義郎「共同体と単位集団」「考古学研究」第6巻1号 考古学研究会 1959年

- 中山後紀・行田裕美「清E遺跡II」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第8集 津山市教育委員会 1981年
- 河本 清・柳瀬昭彦「沼E遺跡」「岡山県埋蔵文化財報告」9 岡山県教育委員会 1979年
- 河本 清・中山後紀他「大田十二社遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第10集 津山市教育委員会 1981年
- 中山後紀「京免・竹ノ下遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第11集 津山市教育委員会 1982年
- 近藤義郎・森成秀樹「岡山縣津山市上原遺跡」「日本考古学年報」19 日本書古学会 1966年
- 栗野克己・岡本寛久「下道山遺跡緊急発掘調査概要」「岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告」17 岡山県教育委員会 1977年
- 漆 哲夫「弥生文化の成立と発展」「岡山津山の史跡」 津山市教育委員会 1978年
- 中山後紀「津山市紫保井遺跡と中崩小住居群」「古代吉備」第15集 古代吉備研究会 1993年
- 河本 清「津山市桃山遺跡作陽高等学校 弥生時代穴群」「古代吉備」第54集 古代吉備研究会 1963年
- 椎木慈司・柳瀬昭彦他「押入西遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」3 岡山県教育委員会 1973年
- 行田裕美「ビシャコ谷遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第16集 津山市教育委員会 1984年
- 小郷利幸「正善施遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第44集 津山市教育委員会他 1992年
- 河本 清・横木慈司「野介代遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」3 岡山県教育委員会 1973年
- 安川豈史「向林遺跡・中崩田墳墓」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第29集 津山市教育委員会 1989年
- 近藤義郎「前方後円墳の時代」 岩波書店 1983年

第3節 調査組織と発掘調査の経過

調査組織

第1節で述べたように、本発掘調査は岡山県教育委員会と津市教育委員会で構成する「沼E遺跡発掘調査委員会」を組織し、実施することとした。その構成は次の通りである。(職名は当時)

委員長	福島祐一	津市教育委員会 教育長(故人)
副委員長	吉光一修	岡山県教育庁文化課 課長補佐(故人)
委員員	谷名通良	津市教育委員会社会教育課 課長(故人)
ク	須江尚志	津市教育委員会社会教育課 課長補佐
ク	光吉勝彦	岡山県教育庁文化課 文化財二係長
ク	河本 清	岡山県教育庁文化課 文化財保護主査
ク	柳瀬昭彦	岡山県教育庁文化課 文化財保護主事
ク	中山俊紀	津市教育委員会社会教育課 主事
監事	井口 茂	津市教育委員会 庶務係長
ク	有元康雄	有限会社津証 代表取締役

調査補助員

近藤正友

調査作業員

清水孫一 清水節代
清水常子 北原多美子
北原はるの 山下 都
中塚欣子

調査協力

安川豊史 国貞圭也
奥 和之 森 潤
光延造 森広琢之



図3 調査区位置図 (1/5,000)

事務局

事務局長 山本峯雄 津山市教育委員会 参事（故人）
事務局次長 須江尚志 津山市教育委員会社会教育課 課長補佐
事務局員 有本清美 津山市教育委員会庶務課 主事
〃 中山俊紀 津山市教育委員会社会教育課 主事
〃 杉山紀子 団体職員

調査経過

発掘調査によって発見された遺構は、弥生中期中葉から後期前葉に属する竪穴住居4軒、掘立柱建物址7+α棟等で、調査区全体の遺構配置は図4に、個々の遺構の概要は8頁の一覧表に示す。

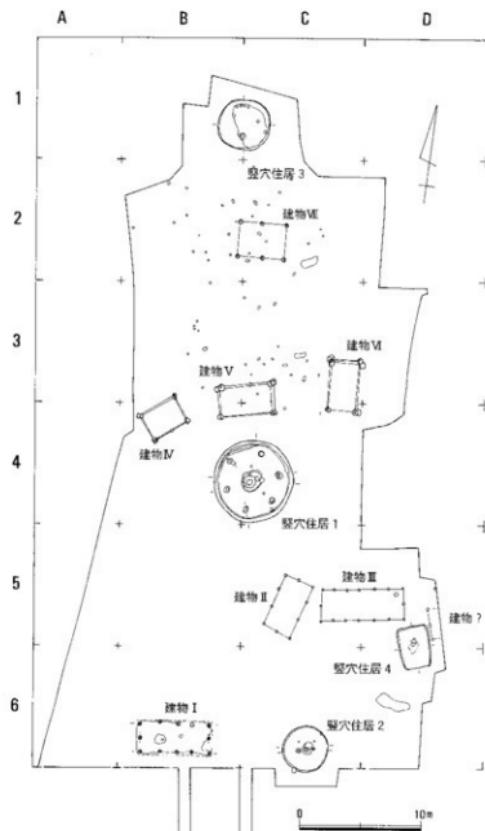


図4 通構配位置図 (1/400)

なお、調査の内容・行程等の概要は、日誌抄をもってこれに換えたい。

日誌抄

11月2日(木)

器材搬入・グリッド組み

〈調査開始〉

11月6日(月) 曇時々曇

D6区 表土剥ぎ、遺構検出

11月7日(火) 曇-時小雨

D5区 トレンチ表土剥ぎ

D4区 トレンチ表土剥ぎ

11月8日(水)

D4区 トレンチ掘り下げ

11月9日(木) 曇時々晴

D3区 第1・第2トレンチ掘り下げ

A5区 トレンチ掘り下げ

11月10日(金) 曇時々晴

B5区 掘り下げ

11月27日(月) 曇

B4C区 竪穴住居1 検出、掘り下げ

11月28日(火) 晴時々曇

竪穴住居1 床面精査

C6区 竪穴住居2 検出

D5・6区 竪穴住居4 検出

11月29日(水) 雪のち曇

竪穴住居2・4 床面検出作業(午後から)

11月30日(木) 晴時々曇

竪穴住居2・4 床面精査

C5区 建物II 検出、掘り下げ、写真撮影

12月1日(金) 曇

竪穴住居2・4 写真撮影、断面実測

B4C区 竪穴住居3 検出、掘り下げ

12月4日(月) 曇

竪穴住居4 断面実測

竪穴住居3 掘り下げ

12月5日(火) 曇時々雨のち曇

竪穴住居4 床面精査

竪穴住居2 中央pit掘り下げ

竪穴住居3 床面まで掘り下げ

12月6日(水) 曇

竪穴住居2 断面写真撮影

竪穴住居3 床面まで掘り下げ

竪穴住居4 遺物出土状況写真撮影

B4C区 柱穴検出作業

建物II 掘り下げ

12月7日(木) 曇

建物II・Ⅲ掘り下げ

竪穴住居4 実測割付け

12月8日(金) 曇時々晴

竪穴住居4 実測

12月11日(月) 晴

竪穴住居4 実測

12月12日(火) 晴時々曇、大霧

竪穴住居3 断面、平面図実測、写真撮影

12月13日(水) 曇

B6区 建物I 柱穴掘り下げ、写真撮影

12月14日(木) 曇時々晴

B4C3・4区 建物IV・V・VI 平面図実測

C2区 建物Ⅲ 平面図実測

12月15日(金) 晴時々曇

建物IV・V・VI・Ⅶ 写真撮影

建物II・Ⅲ 平面実測、写真撮影

竪穴住居1 実測、写真撮影

12月18日(月) 晴

竪穴住居2 遺物取り上げ

12月19日(火) 曇時々晴

建物 レベル入れ

各遺構 図面チェック、補足実測

12月20日(水) 雪

器材搬出

〈調査終了〉

表1 検出造構一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)	柱数	壁体溝	備考	時期
竪穴住居1	円形	直径 650 深さ 33.2 (床まで 26.4)	6	有	中央穴。建て替え。火災。 床面に5~6個体の壺、甕。 石窓2個体。	弥生時代後期初頭
竪穴住居2	円形	直径 380 深さ 11.3	2	有	中央穴。火災。 床面に甕片2個体、サヌカイト 細片多数。	弥生時代後期初頭
竪穴住居3	円形	直径 430 深さ 14.5~40	2	無	変形ベッド。床面中央に焼土 面。 床面、覆土から壺、甕数片。	弥生時代中期末
竪穴住居4	隅丸方形	350×260 深さ 9.1	0	有	床面の中央約50cmの範囲に 焼土面。壺、甕数片。 長方形竪穴住居状の遺構。	弥生時代中期中葉
建物I	方形	280×630	12	無	床面をもち、焼土面2箇所。 上器は細片。 住居4と同機能か?	弥生時代中期末?
建物II	2×4間	250×450	10	—	掘立柱。遺物無。	中世か?
建物III	2×3間	250×680	16	—	掘立柱。遺物無。	中世か?
建物IV	2×6間	230×320	4+1	—	掘立柱高床倉庫か。土器3片。 建て替え	弥生時代中期末?
建物V	1×1間	250×450	4	—	掘立柱高床倉庫か。遺物無。 建て替えまたは補修	弥生時代中期末?
建物VI	1×1間	230 400 1×1 240 430	4	—	掘立柱高床倉庫か。遺物無。 建て替え2回?	弥生時代中期末?
建物VII	1×2間	290×390	6	—	掘立柱高床倉庫か。遺物無。	弥生時代後期?

第2章 遺構と遺物

第1節 壇穴住居址と出土遺物

壇穴住居1 (図5、写真図版2)

この住居は直径6.5mを測る円形住居址で、主柱はP2～P7の6本柱で構成され、各主柱の外縁はそれに対応してやや角張る。肩部から床面までの最大深度は80cm程あり、遺存状況は良好である。火災により焼棄されたらしく、床面及び埋土中から多量の炭化材が発見されている。床面のほぼ中心に掘り方が方形を呈す中央穴があつて、口縁部外周には炭及び灰が混ざった地山土で低い土堤を一巡させている。この中央穴の床面からの深度は約45cmを測る。そして、土堤部分には中央穴に対応するとみられる2柱穴があり、いずれも柱痕を残していた。その痕跡によると、それぞれ直径15cm内の柱が設置されていた可能性がある。床面には側壁に沿って膜体溝が一巡するが、北側部分では部分的に枝分かれし二重にな

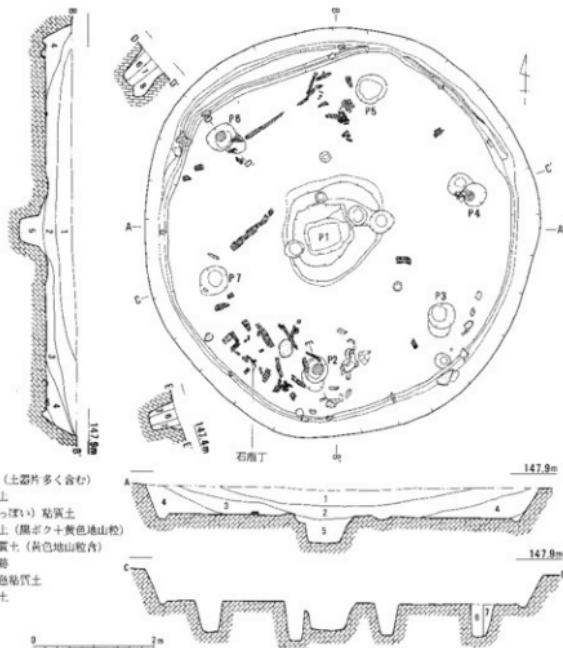


図5 壇穴住居1 平・断面図

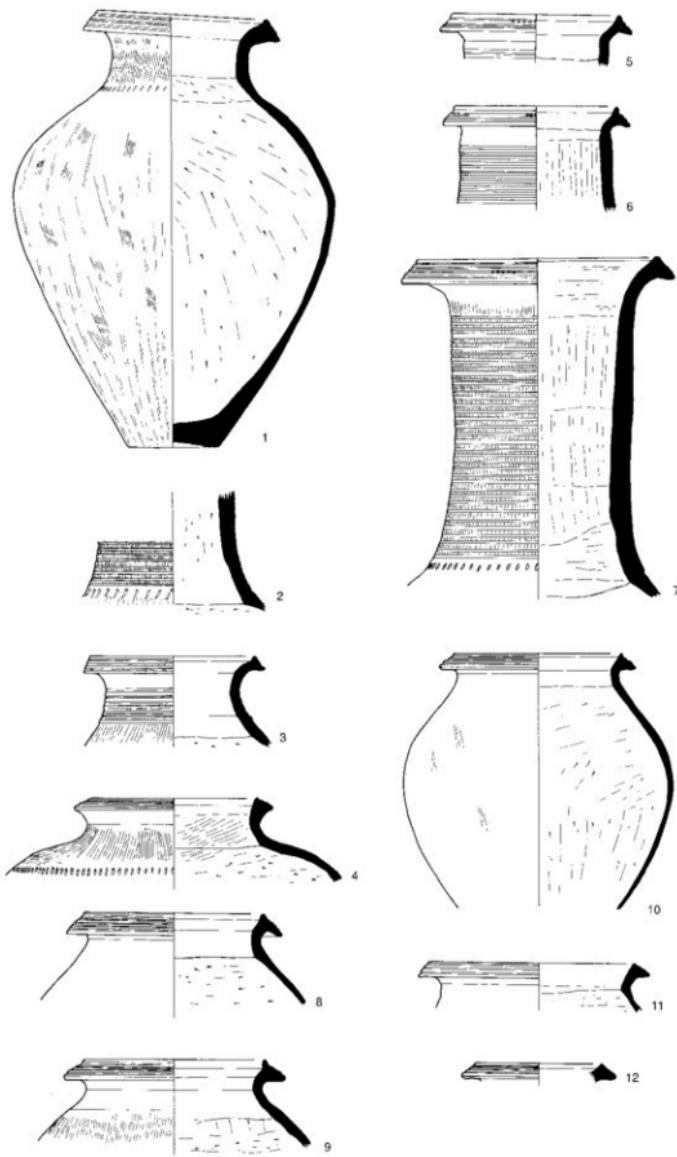


图6 坑穴住居1 出土土器(1)

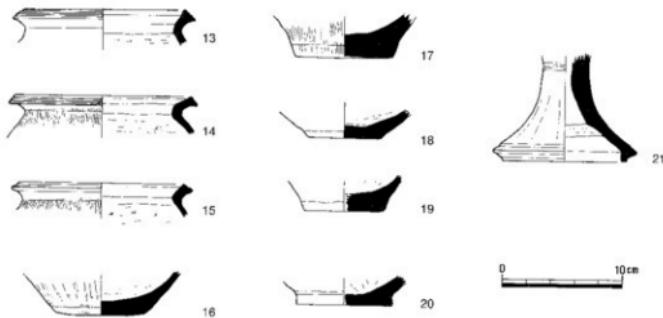


図7 整穴住居1 出土土器(2)

っている。また、P2付近の壁体溝寄りには10cm内外の小砾が集積しているのが注意される。

埋土及び床面には多数の土器破片が残されており、P2の西寄りの床面では石庵丁2点が発見されている。出土土器に時期差はなく、本住居は後期前葉に火災により廃棄されたものとみてよい。

出土土器(図6・7、写真図版7)

1~7は壺形土器。すべて口唇部に数条の凹線文を巡らし、1・4以外は頸部にも縦刷毛調整の多い多条の沈線文を巡らす。5・6・7は口唇部に凹線文を巡らしたち竹管文で飾り、1・2・7には頸部下端に、4は頸部中位に連続きざみ目文を巡らしている。1・2及び10の胴部外面は縦刷毛調整のち笠磨きで、内面は上半はヨコ笠削り、下半は縦方向の笠削りで仕上げられている。

8~15は壺形土器。15以外は口唇部に数状の凹線文を巡らす。15は、ヨコな仕上げ。胴部外面は縦刷毛のちなでにより平滑に仕上げられているものがある。内面は上半はヨコへら削り下半は縦笠削りにより仕上げられているが、頸部や下位までヨコな仕上げられているものが含まれる。

16~20は、壺形上器ないしは甕形土器底部破片。壺・甕の区別は明瞭でない。外面は、16が縦刷毛のち笠磨き、他は縦刷毛のちなで仕上げ。内面はいずれも笠削りで、18・19・20には削りの後になで仕上げされたとみられる痕跡がある。

21は、高杯形土器脚部片。胴部中位に5条の沈線文、脚部外面にかすかに縦方向の沈線文の痕跡が残るがいずれも遺存状況悪く明瞭でない。内面筒部はなで仕上げ、胴部上位に笠削りの痕跡を残し、下半はヨコな仕上げで仕上げられている。

1・3・4・8・10・11・17は床面出土、他は埋土中で発見されたものであるが、いずれの土器の特徴にも時期的差は認められず、おおむね同時期に属するものである可能性が強い。大田十二社遺跡1期とした袋状貯蔵穴P E 7号及び9号住居出土土器に類似のものがみられ、ほぼ同時期の所産と考えられる。後期初頭の土器と位置付けられ、岡山県南部の上束遺跡土器編年鬼川市I式に相当するものとみられる。

特に1および7の壺などは岡山県南部の土器に特徴がきわめて類似し、搬入品ではないまでも隣接する大田十二社遺跡出土土器と対比すると、沼E遺跡の出土土器の特徴をなすものであり、後期初頭の遺跡毎の土器のバリエーションを考える上で、貴重な資料である。

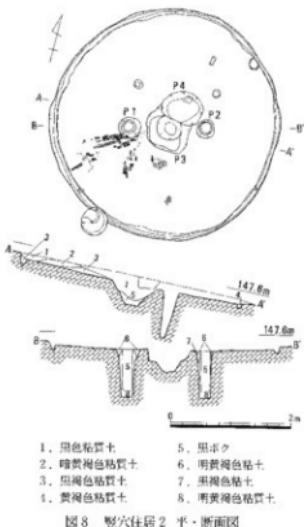


図8 穹穴住居2 半・断面図

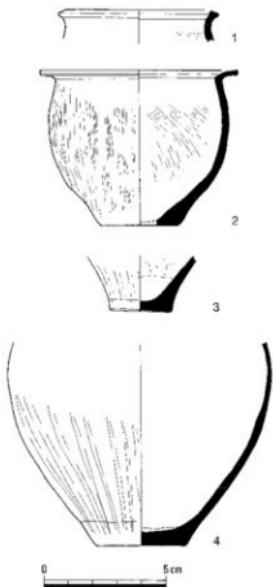


図9 穹穴住居2 出土土器

穹穴住居2 (図8、写真図版3-1)

直径3.8mの円形住居址で中央穴をもつが、口縁部の土堤を作らない。検出面から床までの最大深度は約10cmを測り、遺存状況は比較的良好で壁体溝が壁端に一巡する。中央穴の床面からの深度は約35cmで、平面形は円形を呈する。中央穴の両脇にP1・P2の2柱穴をもち、共に柱痕跡を残している。その痕跡からみれば、両柱穴には直徑15cm内の柱が据え付けられていたことになる。これを住居主柱と考えれば2本柱の竪穴住居となるが、中央穴に付属する柱と考えれば床面に柱をもたない構造の竪穴式住居ということになる。

本住居も床面に炭化材を残し、火災廃棄された住居址とみられる。床面には、ほぼ一個体に復元される鉢形土器1点と壺胴部が残されており、これらの土器は住居の廃絶時期を示していると考えられるので、おむね弥生中期後葉に火災により廃棄された住居とみてよい。

なお、中央穴の北寄り及び南西辺に存在する柱穴は一連のものとみられ、いずれも住居廃絶以後に切り込まれたものである。なお、床面でサスカイトチップ多数が発見されている。

出土土器 (図9、写真図版8)

1は甌形土器口縁部破片。内外面ヨコな仕上げ。2は鉢形土器。口縁部内外面はヨコな仕上げで端部をやや肥厚させる。胴部外面はタテ方向の刷毛仕上げ、内面は斜め方向の刷毛仕上げが認められる。平底であるが、一部を欠損する。

3・4は壺形上器の底部及び胴下半。外面はタテ方向の範磨き仕上げ。内面はなで仕上げで、指頭圧痕とみられる凹凸を残す。

2・4が床面出土の土器で、この2点から判断すると中期後葉に属し、そのうちでもやや古い様相を示している。床面にサスカイトチップ多数を残していることも、中期の古手の住居址でよくみかけられる現象であり、その点からも本住居の廃絶時期を中期後葉とすることができよう。なお、その場合1と図示しなかったP1出土土器は後期初頭の様相を示しており、これらは混入と考えられる。

堅穴住居3 (図10、写真図版3-2)

直径約4.3mの円形住居址で、やや不整形を呈する。検出面から床面までの最大遺存深度は40cmあるが、床面のありかたは特異で住居形状をつかみ難い。また、壁体溝・中央穴とともに発見されていない。他に大小のピットが10穴近く存在するが、P1・P2を除くものはいずれも浅く、柱穴とすることはできない。P1は径約30cm、床面からの深度が約50cmあり、底部分に二枚の平石が残されていた。P2は少し小ぶりで同深度約30cm、やはり底部に石材が残されていた。しかし、共に柱痕跡は確認されていない。また、床面は極めて特異な凹凸を示し、住居であったことを疑わせる。中央部の直径1m程の範囲には円形に焼土面も残されていた。

遺物としては少量の土器片が発見されているが、その土器片には中期中葉・同後葉・後期前葉のものがそれぞれあり、廃絶時期の特定はしにくい。さらに特異な住居形態から、遺物は搅乱による流入の可能性も考えられ、床面出土土器から判断すれば住居廃絶時期を後期前葉とするのが常道であるが、柱穴P1が本住居に伴うとすれば、中期後葉の可能性もある。

また、P1が後に切り込まれた柱穴とすれば、1が本来の廃絶時期を示し、中期中葉に廃絶された住居とみることも可能である。いずれにしろ、出土遺物から本住居の廃絶時期を決定することは困難である。

出土土器 (図11、写真図版8)

1は、壺形土器肩部破片。外面はタテ方向の細かい刷毛目仕上げの痕跡をとどめている。頸部下端に幅広の貼付凸帯を巡らせ、指頭により連續きざみ目肩痕をつけている。内面はおおむねまでにより仕上げられているとみられるが、遺存状態が悪く正確ではない。2は、壺形土器口縁部破片。口唇部に3条の凹線文を巡らす。II縁部内外はヨコなで仕上げ、胴部内外面もなで仕上げ。砂粒細粒を多く含んでいる。3は、壺形土器口縁部から肩部にかけての破片。II縁部をやや肥厚させ、端部を上下に張り出している。口縁部内外面は、ヨコなで仕上げ。内面頸部下端以下は、ヨコ方向の幅の広い箇所削りで仕上げられている。1・3は、床面出土。2は柱穴P1埋土中からの出土である。それぞれ所属推定期が異なり、1は中期中葉2は中期後葉。3は後期前葉に属するとみられる。

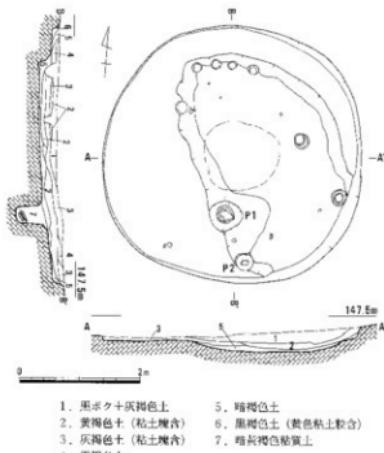


図10 堅穴住居3 平・断面図

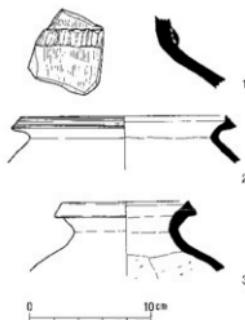
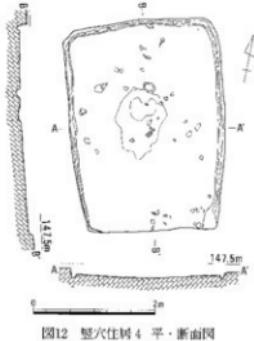


図11 堅穴住居3 出出土器



出土土器 (図13、写真図版8)

1は壺形土器口縁部破片。ラッパ状に上方へ開く口縁部端部をつまみ上げ、口縁屈曲部に連続きざみ目文を巡らす。口縁部外面に断面三角形の細い貼付凸帯を3条巡らし、各凸帯端に連続きざみ目文を巡らす。頸部外面はタテ方向の刷毛仕上げ、口縁内面端部はヨコなで仕上げであるが以下はナナメ方向の荒い刷毛仕上げの痕跡をとどめる。

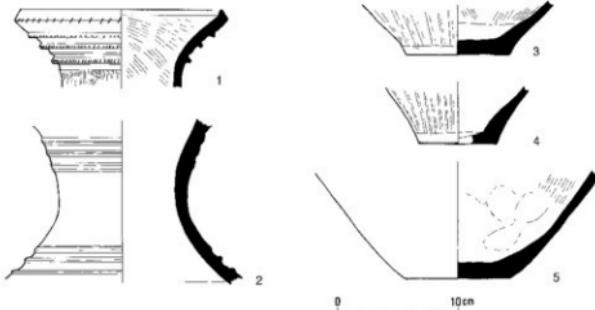


図13 壁穴住居4 出出土器

2は、器台形土器胴部片とみられるが、この時期に類例は知られていない。胴部上方及び下方に各3条の断面三角形の細い貼付凸帯を巡らし、各凸帯端には1と同様の連続きざみ目文を巡らしていたと思われるが、遺存状況が悪くて確認出来ない。内面調整も剥離が激しくて不明である。胎中に1~3mmの砂粒を含み、全体に白褐色を呈する。3~5は、壺底部破片。3・4は外面タテ方向の荒磨き仕上げ、3は剥離が激しく確認困難。内面は3・5に刷毛目をとどめる以外なで仕上げで、ところどころに指頭圧痕をとどめる。

1~5はすべて床面での出土品で、時期差によるとみられる特徴の変化はない。おおむね中期中葉のうちでも古手の時期に相当する。沼E遺跡第2次調査による7号長方形壁穴住居状遺構の出土土器と類似の特徴をもち、同時期の所産と考えられる。

第2節 挖立柱建物址

建物I (図14、写真図版4-2・3)

梁間2間、桁行4間12本の柱で構成される掘立柱建物状の遺構で、床面ないしは土間をもつ。床面は調査当時すでに薄い表土下に露呈していたが、調査によりほぼ全域の範囲が確認できた。この痕跡によると、長辺6.3m、短辺2.8m程度の規模をもっていた。主柱穴は極めて整然と並び、各柱間隔は最大1.7m、最小1.1mである。1柱穴を除きすべてに柱痕跡が残され、それによると直徑15cm内10cm以上の柱が用いられていた可能性が強い。両短辺中央の柱痕跡はやや細く、そのことが建物構造にかかわっているのかも知れない。

床面棟通りの西寄りには、長辺1m、短辺0.7m程の楕円形の焼上面が広がり、中央部にも直径30cm程の焼土面が残されていた。壁体溝に相当するものは検出されていないが、焼土面の位置や東短辺の南柱間あたりの床面状況から、東妻入りの建物であった可能性が強い。

遺物は柱穴埋上から弥生土器細片が出土しており、その土器の特徴から中期末葉の建物であった可能性が強い。遺構の形態としては極めて特殊で、竪穴構造であった可能性もある。この建物の機能的な性格を探る上で参考となるものに、長方形竪穴住居状遺構がある。同遺構は、津山市の調査遺跡のうち9遺跡14例以上が知られる。いずれも床面中央奥に強固に焼け固まった地床炉をもち、中心部は還元状態を呈するものさえある。これらの遺構はいずれも弥生中期に属するもので、どういったわけか後期の集落遺跡での発見例で確実なものはない。中期では中葉に遡る例が紫保井遺跡などにあり、中期終末までには確実に作り続けられ、美作の中期集落ではほぼ普遍的に存在していたかのようである。

本遺跡例と異なるのは、床面に建物状の柱配置をとる明確な例が存在しないことである。本例が機能上その種の遺構と同様なものであるとするならば、この点のみ形態的に相違するということになる。

この種の長方形竪穴住居状遺構の形態の特異性から、男子小屋あるいは作業場とされることが一般的であるが、「作業」の内容については今一つ明らかでない。また、宮本長二郎は住居と捉え、繩文建築の遺構である可能性を示唆している。ちなみに、ビシャコ谷遺跡では火災にあい、本来の調度品も取り出されなかったような状態で検出された長方形竪穴住居状遺構があり、床面から多量の土器が折り重なるように発見されていて、その器種別構成は壺形土器44点、甕形土器13点、高杯形土器5点、器台形土器1点、鉢形土器2点と報告されている。

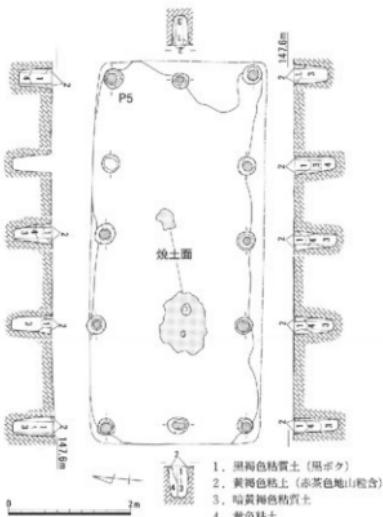


図14 建物I 平・断面図

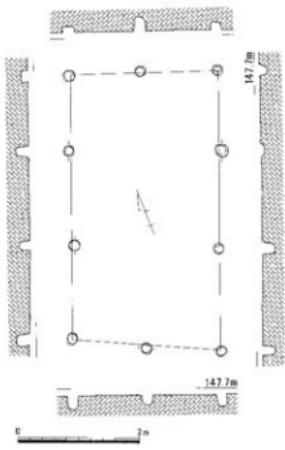


図15 建物II 平・断面図

建物II (図15、写真図版5-1・2)

梁間2間、桁行3間の10本の主柱で構成される掘立柱建物である。短辺2.5m、長辺4.5mの規模をもつ。柱穴の配置はわずかに疎ながら、周辺に類似の柱穴がほとんどないため、建物としてまず間違いない。柱穴の掘り方は、直径16~20cm、深さ12~23cmと比較的小振りであり、柱の使用材の推定規模からみて、簡略な建物であったことが推定される。柱穴内の埋土は、いずれも暗褐色を呈す粘質土で、柱痕跡は認められない。

なお、どの柱穴からも遺物の出土がなく、時期は不明である。ただ、弥生時代中期末の可能性が高い建物Iと比較すると、柱穴間の距離などに類似点が見られるものの、柱穴掘り方の規模に端的な違いがあり、少なくとも弥生時代ではないと思える。

建物III (図16、写真図版5-2)

建物IIの東側に隣接して検出された、梁間2間、桁行6間の掘立柱建物である。短辺2.5m、長辺6.8mの長大な建物である。建物IIと同様に、柱穴間の距離または配置に多少不揃いな点が認められるが、周辺に柱穴がほとんどなく、当規模の建物とみて間違いない。柱穴掘り方は建物IIと規模が酷似しているが、深さは約4~24cmと比較的浅い。16本の柱穴のうちの1本にだけ柱痕跡が認められ、その痕跡から直径約12cmの柱が用いられていたと推定される。また、北東隅の柱穴底部のレベルは、南北方向で8cm、東西方向で44cmの差があるものの、北東隅の柱穴がわずかでも認められるところから、当時の地形も北東隅に向かって下がっていた蓋然性が高い。

この建物からも遺物の出土がなく、平面形態等から、本来は建物Iと同種の床面をもつ建物ではないかとの感覚も持ったが、一部緩斜面に占地されている点や柱穴規模が建物IIに類似することから、時期および建物機能に違いがあると考えたい。柱穴内の埋土は色・質ともに建物IIに酷似していて、ほぼ同時期に存在していたと思われるが、主軸のズレと近接度からは同時存在の可能性は少ない。

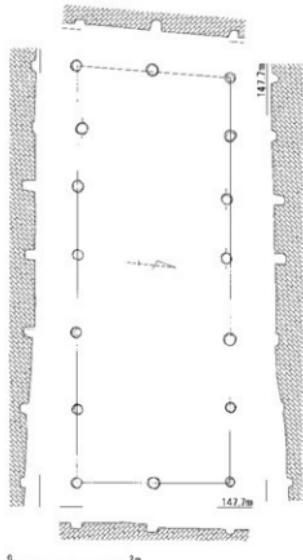
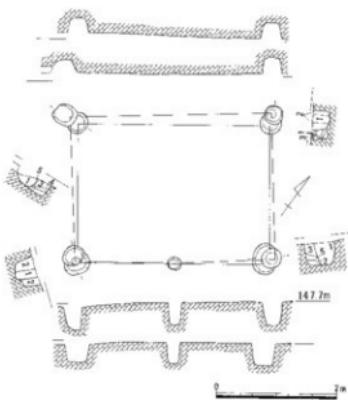


図16 建物III 平・断面図

建物IV (図17、写真図版5-3)

梁間、桁行ともに1間の掘立柱建物で、短辺2.3m、長辺3.2m程の規模をもつ。南側の長辺のほぼ中央に小柱穴を有す。西側の柱穴はほぼ重複して新旧の切り合いが認められ、建て替えが行われた可能性が高い。柱穴規模は前者が径約30~35cm、深さ20~40cm、後者は径約35~50cm、深さ25~40cm、どちらに伴うか不明な小柱穴は径22cm、深さ36cmを測る。新の4柱のうち2柱には柱痕跡が残存しており、その痕跡から径13~14cmの柱材が使用されていたことがわかる。

柱穴内の埋土は、柱痕跡が黒褐色、掘り方が黄褐色~暗黄色の粘質土であり、柱穴内出土の3片の上器片は、小片ながら中期末の特徴をもつ。高床の倉庫の可能性があろう。



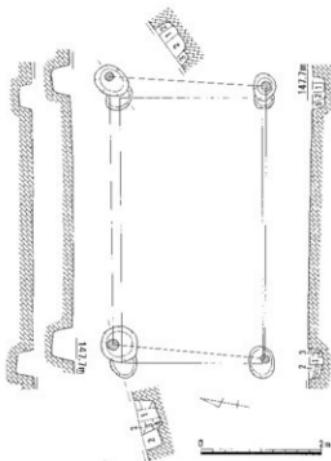
1. 黒褐色粘質土(黒ボク)
2. (3) 黄褐色粘質土(黄色七塊合)
3. 黄色七塊
4. 黑色粘質土(黒ボク)
5. 黄褐色粘土

図17 建物IV 平・断面図

建物V (図18、写真図版6-1)

梁間1間、桁行1間の掘立柱建物で、短辺約2.5m、長辺約4.5mの規模をもつ。いずれの柱穴にも柱痕跡を残し、柱痕径は15~20cmと推定される。4柱のうち3柱穴に重複が認められ、建物IVと同様ほぼ同位置・同規模で建て替えられたか、補修されたものと看取られる。柱穴規模は新が径約40~60cm、深さ23~37cm、旧が径約35~50cmを測る。

柱穴内の埋土は柱痕跡が黒ボク類似の黒褐色を呈すほか、建物IVと大差はない。なお、共伴遺物の発見はなく時期は不明であるが、建物IVとの類似関係からみれば、弥生時代中・後期の高床倉庫である可能性が強い。



1. 暗褐色粘質土(黒ボク混)
2. (3) 黄褐色粘質土(黄色粘土塊合)
3. 黄褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 黄色土(黒ボク)

図18 建物V 平・断面図

建物VI (図19、写真図版6-2)

梁間1間、桁行1間の掘立柱建物で、短辺2.3m~2.4m、長辺4.0~4.3mの規模をもつ。この建物の南西隅の柱穴を除く3柱穴は、それぞれ重複がみられ、2回の建て替えまたは補修が行われた可能性が強い。柱穴の規模は新とともに径50cm前後、

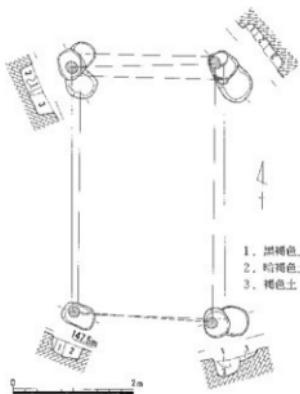


図19 建物VI 平・断面図

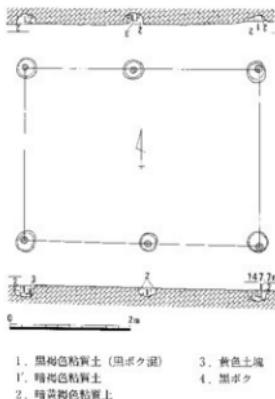


図20 建物VII 平・断面図

深さ15~25cmを測る。また、廃絶時の柱穴には4柱全部に柱痕跡が認められ、それによれば径16~20cm弱の比較的太い柱が用いられていたことがわかる。共伴遺物がなく時期は不明ながら、建物IV・Vと類似する点が多く、弥生時代中・後期の高床倉庫とみてまず間違いない。

建物VII (図20、写真図版6-3)

梁間1間、桁行2間の6本柱で構成される掘立柱建物で、竪穴住居3と建物Vのほぼ中間あたりに検出された。短辺2.9m、長辺3.9mを測り、柱穴規模は径30~36cm、深さ15~18cmと比較的縮っている。各柱穴ともに柱痕跡を残し、いずれも径10cm前後の柱が用いられたらしい。柱痕跡は黒褐色~暗褐色、基本的に掘り方内の埋土は暗褐色を呈し、建物IV~VIと大差はない。

共伴遺物がなく時期を確定することは困難であるが、柱穴掘り方の規模からすれば建物II・IIIよりは建物IVなどに類似点が多く、弥生時代とみられる。

第3節 その他の遺構

その他、不整形円状の浅い窪みや小柱穴状の落ち込みが検出されている。前者は長軸1.1~2.8m、短軸45~70cmを測る窪み3か所で、黒ボクに似た土が不整形に溜まった感じの、風倒木の痕跡の可能性が強い。後者は径10~20cmのもの約30個、径20~30cmのもの20数個が存在する。これらの大半は、おもに調査区の北半部の建物VIIおよび建物Vの周辺に分布しているが、とくに規則性は見いだせず建物として認定するに至らなかった。

ただ、竪穴住居4の北東側に近接して存在する柱穴3個は、1.2~1.3m間隔でほぼ直線上に位置し、径20cm前後、深さ22~34cmを測り、梁間1間、桁行2間建物の西辺柱穴列の可能性もある。なお、予想される東側の柱穴は、調査区外のため確認はできていない。

第4節 石庖丁とその他の土器

出土遺物のうち遺構に伴う土器については、おもに本章第1節で取り扱ったが、その他遺構に伴わない石庖丁1点と竪穴住居1出土の石庖丁2点、それに表土中から出土の土器のうち図示可能な1点があり、編集の都合上この節で扱う。(図21、写真版8)

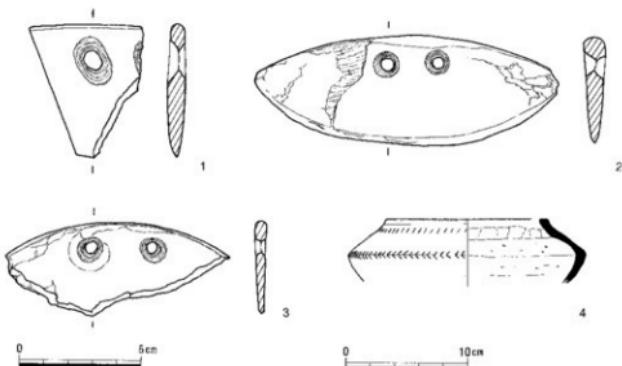


図21 石庖丁とその他の土器

1は、調査当初にD5区に設けたトレーナーから出土した石庖丁の欠損品である。2・3は、どちらも竪穴住居1の床面近くで出土しており、2は完形、3は刃部を大きく欠損している。石庖丁はいずれも磨製で、石材は1が結晶片岩、2・3は美作一帯の弥生遺跡出土の石庖丁に多くみられる緑色片岩が使用されている。

4の台付壺の一部らしき土器片は、胴より上半のみが発見されているが、出土地点は不明である。4は「く」の字に屈曲する胴部をもち、「ハ」の字状の肩部の上はわずかに立ち上がって口縁部に至る。胴屈曲部の外側には羽状の連続したきざみ目を巡らし、口縁部下にも斜線状の連続きざみ目文を一巡させる。器壁は外側と口縁部内面をヨコなどで仕上げ、胴部内面にはヨコ方向の範削り痕跡をとどめる。

これらの時期は、2・3が竪穴住居1出土土器と共に伴することから弥生後期前葉、4もその形態・調整などの特徴からほぼ同時期が考えられよう。

参考文献

- 河本 清・中山俊紀他「大田十二社遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第10集 津山市教育委員会 1981年
柳瀬昭彦「川入・上東一川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土器について」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」16 岡山県教育委員会 1977年
中山俊紀・行田裕美「沼E・通跡II」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第8集 津山市教育委員会 1981年
中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」「古代・古跡」第15集 古代古跡研究会 1993年
行田裕美「ビシャコ谷遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第16集 津山市教育委員会 1984年

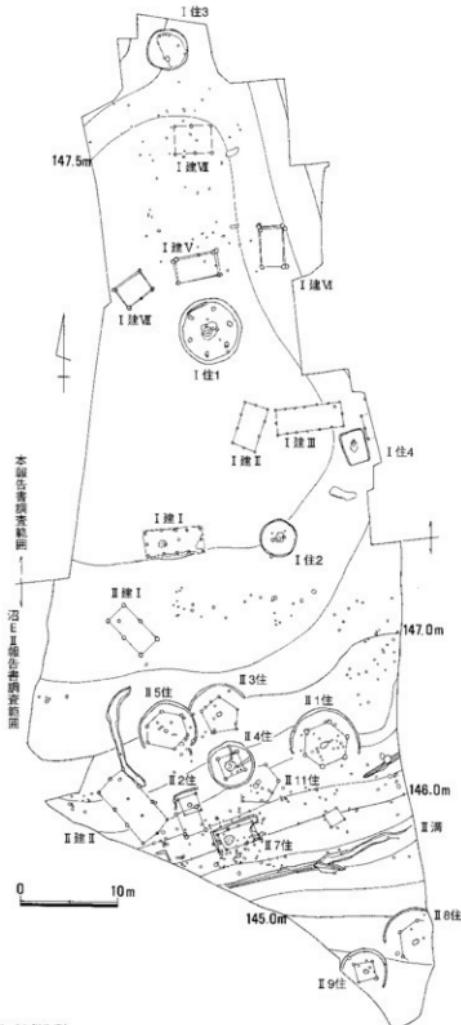


図22 沼E遺跡 遺構全体図 (1/500)
 Ⅰ—沼E I (本報告書)
 Ⅱ—沼E II (渋山史料調査第8集)
 住—竪穴住居および竪穴住居状遺構
 建—竪立柱建物

図22 沼E遺跡 遺構全体図 (1/500)

第3章 まとめ

発掘調査は第1章第1節の経過の後、おもに昭和53年の11~12月の約2ヶ月を費やし、竪穴住居4軒、建物7棟+α、柱穴多数などの検出をみた。その後、昭和54年7~10月には調査区の南側に隣接する山林約1,300m²を対象にして、土取り後宅地造成の計画に先立ち発掘調査が実施され、竪穴住居8軒、長方形竪穴住居状遺構2軒、溝、柱穴多数などが検出された。後者は「沼E遺跡II」として調査報告書が刊行されている（註1）が、前者は諸般の事情により報告書の刊行が遅滞し、ここでようやく刊行の運びとなった。以下に、沼E遺跡南半（本調査分）の調査成果の概要と北半（沼E II調査分）の成果を繋げた沼E遺跡全体の検討を行い、その評価について若干の考察を加えたい。

本調査の成果の一つは、検出された10を越す遺構のうち一部を除く大半の時期がある程度明らかになったことである。これは、單一時期（同時存在）の集落構成を論じるときの最低条件でもある。また、出土上器とくに竪穴住居1出土の後期初頭の一群の特徴は県南部の上東式そのものであり、南半部および北西部の墓出土の同時期の土器を含めて、周辺の大田十二社遺跡（註2）等の同時期の土器との間に多少の地域差が認められる点は、本集落の性格を考えるうえで示唆的である。今一つは、床面をもつ掘立柱建物（建物I）の発見である。検出状況や類似遺構との比較等については本文（15頁）に詳しいが、周辺の削平頻度があと5cmも过剩であれば、土間状の貼り床面および焼土面は残らず、単なる2×4間の掘立柱建物で高床倉庫などに比定されていたであろう。また、逆に削平頻度があと5cm以上少なければ、竪穴住居状を呈するか平地住居かなどの区別がついたであろうが、残念ながら遺構の性格確定には至っていない。ただ、類似する遺構としては長方形竪穴住居状遺構（註3）があり、建物Iは現時点では竪穴かどうかの判定はつかないが、機能的には同種と思われる所以、以下長方形竪穴住居状遺構として扱う。なお、機能についての評価等は別項で後述する。

さて、予想される沼E遺跡の範囲の地形は、丘陵尾根上のさらに一段小高い丘状を呈す東西約70m、南北約130mの楕円形の範囲の、標高約147.6mの頂部平坦面から標高約143mの裾部までの緩斜面に、遺構が占地されている。既調査部分は頂部からおもに南緩斜面にかけてであり、遺跡範囲の全体（約9,000m²）から見れば15~16%と少なく、南半部を加えても1/3にも満たないが、調査で得られた時期別の遺構配置や遺構の占地状況等から、集落の構成を推測してみる。

時期的には弥生中期・中葉（古）【1期】、同中期・後葉（新）【2期】、同後期・前葉（古）【3期】の3期（図23）に大別される。ただし、中期末から後期初頭の幅をもつ遺構なども存在するため、それらは両方の時期で扱うこととしたので、念のため申し添えておく。

1 集落構成

中期・中葉【1期】は、頂部の平坦面から北斜面にかかる部分にI住3（沼E遺跡I）の竪穴住居3の略、以下同様に略して表記）、東緩斜面にかかる肩部に小形の長方形竪穴住居状遺構I住4、南緩斜面の中程に同II7住、標高145.5m付近の等高線にほぼ並行してII溝が見つかっている。近隣のほぼ同時期の遺構は、紫保井遺跡の2号住居くらいしかなく、集落構成上の参考にはならないが、中期中葉の新から中期後葉の古に比較的良好な集落構成が捉えられている（註4）。とくに後者の時期には、竪穴住居2

弥生中期・中葉（古）

弥生中期・後葉（新）

弥生後期・前葉（古）

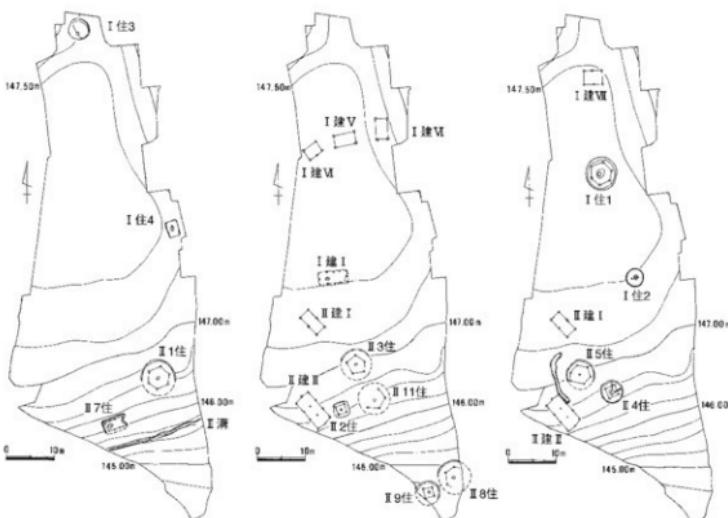


図23 沿E道路 集落の変遷 (1/1,000)

棟・長方形竪穴住居状造構1棟・柱列1造構が、丘陵頂部の傾斜変換線に沿い谷頭を望んで緩く弧状に配置されているようで、本遺跡のほかの遺構も、小丘陵の頂部を除く東から南にかけての緩斜面に占地されているとみられ、少なくとも2~3軒の通常住居の存在が予想される。そして、II溝は区画溝であり丘陵の周開の標高145.5m付近を繞っていたとすれば、この集落の大まかな領域は5,000m²前後であったと推定される。また、頂部を含む比較的平坦な部分には遺構は確認されていないが、このエリアがどの程度あるいは何に利用されたかの確証はないものの、単なる広場ではなく畠地の利用は可能であろう。

中期・後葉（2期）は、丘陵頂部に掘立柱建物I建IV~VI、頂部の南斜面肩部近くに長方形竪穴住居状造構に類似するI建Iと掘立柱建物II建I、肩部に近い南緩斜面に竪穴住居II-2住・II-3住・II-11住と掘立柱建物II建II、裾部の緩斜面に竪穴住居II-8住・II-9住がある。これらのうち、各遺構の近接度を加味すれば、一時期に併存した遺構の共存関係が漠然とではあるが浮かび上がる。つまり、位置関係からII-3住・II-11住・II-2住の三者間、およびII-8住・II-9住の二者間には共存の関係はなく、同じグループの中での1軒ずつが同時に存在したとすれば、一時期の遺構は竪穴住居2棟+α、長方形竪穴住居状造構（I建I）1棟・高床倉庫（I建IV~VI、II建I・IIのうち）1~2棟の併存単位が考えられる。しかし同時期の押入西遺跡（註5）例のように、丘陵斜面に平行に各竪穴住居が存在し、他の遺構とともに等高線におおむね沿った弧状配置をとっている（註6）とすれば、標高146~147mの丘陵肩部付近の緩斜面と標高144~145mの裾部付近の両者が、それぞれの群を構成していたとの見方もできよう。

いずれにしても南から東にかけての緩斜面には、調査区外にも数棟の竪穴住居の存在が想定され、この時期にこの集落での人口のピークを迎えたことは間違いない。

後期前葉【3期】は、丘陵頂部に竪穴住居Ⅰ住1、肩部寄りに竪穴住居Ⅰ住2と掘立柱建物Ⅰ建Ⅶ・Ⅱ建Ⅰ、肩部に近い南斜面に竪穴住居Ⅱ4住・Ⅱ5住と掘立柱建物Ⅱ建Ⅲ、丘の西裾部にⅡ墓群（位置は図24参照）があり、遺構の近接度およびⅡ建ⅡがⅡ5住に先行することなどから、一時期別の併存は竪穴住居3棟+α、高床倉庫1~2棟の構成での共存関係が想定される。そして、これらは後期初頭の比較的短期間（土器の一型式の中）に営まれ、廃絶の後は少なくとも中世までこの丘陵部分が集落としては利用されなかつ

たらしい。この時期の遺構配置において、前者との相違は、丘陵の頂部に竪穴住居が占地し他の遺構も標高146.5より上部の比較的なだらかな部分が利用されていることなどが挙げられる。そして、またま丘陵の裾部（標高145m付近）の土取り跡の断面にかろうじて残っていた土器棺墓・木棺墓・土壤墓の発見により、住居区とわずかに離れた集落の外れに墓域をもつことが判明し、後期初頭の集落構造を知る一例として注目される。

以上、大別して3時期にわたる変遷が捉えられ、中期末から後期初頭にかけては、集落構成がわずかに変わりながらも連続して存在した状況がうかがえる。しかし、集落の最初（中期中葉の古段階）の設営以降連続して営まれたわけではなく、中期中葉の新段階と中期後葉の古段階の遺物を伴う遺構は確認されていないことから、長期間の空白があったようである。この空白の直接的な要因が何であったか不明ながら、この集落が決して広くない独立丘陵上の環境に囲まれた区域に居住していることから、中期の中葉に近隣の集団間に緊張関係が生まれ、拠点的な集落から分村あるいは派遣された小単位集団が短

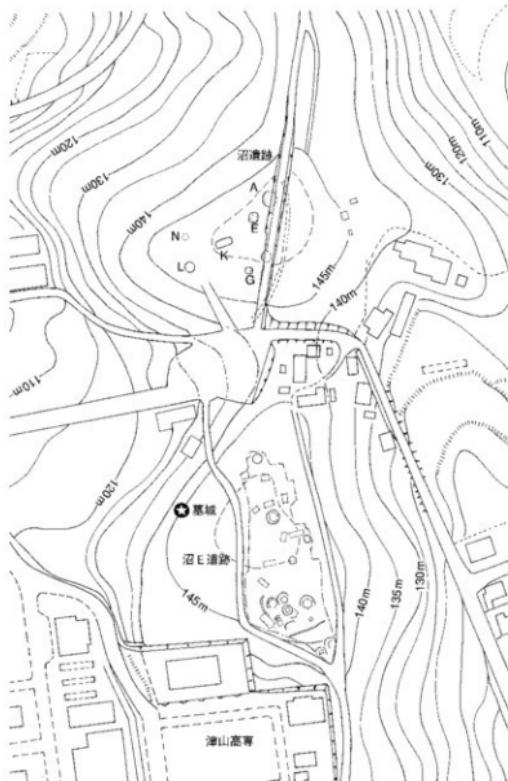


図24 沼遺跡と沼E遺跡の遺構配置相関図（1/4,000）
【沼遺跡部分については「部改変」】

期間（緊張関係が解消に至る期間）のみ居住したことを示しているようでもある。

ここで、この丘陵の北方約200m地点に存在する沼遺跡（註7）の集落構成との比較をしてみよう。

沼遺跡は、1950年代の初めに三次にわたって発掘調査が行われている。ちに近藤義郎は、その成果を基に「沼遺跡のような集落遺跡を、共同体を構成する一つの小単位集団である」（註8）と位置づけ、考古学のうえで具体的に共同体を捉える論証を行った。近藤のこの論旨は、その後の集落研究の方向性をリードするとともに、その後の発展に先駆的な役割を果たした。

沼遺跡の構造は、図24のように標高146.7m前後の舌状の丘陵頂部付近から南緩斜面に至る肩部にかけて分布し、報文によれば丘陵のほぼ中央部を南北に走る道路により分断された西地区（調査に及んだ地区）に、A・E・Gの3住居（完掘）とB・K・Lの住居および住居址の可能性のあるN（位置と形状のみ確認）、さらに土器の詰まったMピットなどが見つかっている。そして、それらの時期はA・G住居が弥生中期後半、E住居が弥生中期末または後期初頭前後としている。また、東西地区を含む台地上の表面採集の上器は総数が少ないものの、壺・壺・器台・高杯・鉢の各器形が出土していて、壺を除いて特に櫛描波状文を持つ破片が多く、同時に四線文の盛行と銘文の存在も指摘され、さらに住居および住居の可能性のあるL・N・Bの地点では櫛描波状文の土器が見つかっていないとしている。いっぽう、調査の及んでいない東地区は堅穴住居が確認されていないものの、表面採集で得られた土器は西地区よりもやや多いことや平坦な地形であることから、堅穴住居の多くが東地区にも存在するであろうと考えられている。そのほか、報告書刊行のうち、東地区の西寄りに周溝が掘りめぐらされていることと、それから東に約30mほどはなれて、高床の埴造物遺構1～2の存在が明らかになっている（註9）。

沼遺跡と沼E遺跡とともに、それぞれの予想される集落の広がり全体からすれば半分にも満たない調査範囲であるため、資料も情報も限定されることはないが、両者にいくつかの共通点がうかがえる。まず、前にも少しふれたように地形そのものとその占地の状況である。わかりやすくいうと、両者ともに標高約145mから同147.5mぐらいまでの比較的なだらかな丘陵上に立地し、両遺跡のほぼ中间部分は南東側と西側から迫ってくるそれぞれの谷の接点、つまり峠（峠）にあたり、それを境に両者は南北に相似形に近い形で存在する。ちなみに、この峠の東側は宮川の支流である後川流域に形成された南北に長い志戸部の平野のほぼ中間に至り、西側は宮川本流の下流域に拡がる比較的広大な平野の北東隅につながる。周辺の地形を参考にすれば、この峠は東西の平野をつなぐ連絡道の要所の一つであることは明らかであり、それを北と南から眼下にする両遺跡の位置はまるで関所の役目を果たすかのようである。

次に、時期は沼遺跡が沼E遺跡の2期～3期に併存していた可能性が高く、さらにいえば、前者の表採土器に櫛描波状文片が多く混在することから、とくに未発掘の東地区に後者の1期あるいはその直前の時期の集落の存在も想定される。とすれば、両遺跡はほぼ同時期に存在した廃絶していたことになり、両単位集団の関係が単なる血縁関係による隣同士というだけでなく、拠点集落からムラの出入り口を押さえる使命を帯びて派遣された複数集団の居住地であったとは考えられないであろうか。

2 遺構の性格

中山後紀は、中期の住居群を構成する遺構（通常住居・高床倉庫・付属施設・墓）に「長方形堅穴住居状遺構」を加え、5つに分類（註10）した。さらに、その遺構の規模や特徴によって2～3に区分し、整理を加えた。筆者は、この分類および区分に関して基本的には異論はないが、「長方形堅穴住居状遺構」

の解釈について今少し整理しておきたい。

中山はこの種の遺構を「強固に焼固まった地床炉を中心線奥側に規則的にもつこと」や「竪穴の隅がほぼ直角をなす明確な長方形」であり、「建築構造上も竪穴住居と明確な相違を示す」(註11)などの特徴をあげ、遺構の大小や柱の有無でなく、機能面からこの種の遺構を通常住居と区別した。そして、この種の遺構が、「火炊き場として使用された建物」であり、「物置、作業場とするのは不適切」とし、「もっとも可能な機能推定は、炊事小屋とすること」(註12)と考えた。これは、選択肢の一つとしては可能性はあるが、果たして建物の規模の大小や柱の有無に関係なく一律に炊事小屋といえるのであろうか。炊事小屋とした場合、一単位集団と思われる建物構成の中に1遺構が想定され、その小屋の中で一単位集団の人数分(推定20人前後か)の食料の煮炊きが行われたことになり、一度に中程度の甕を5~6個使用したとすると、その行為によって生じる床面への焼上痕跡は、少なくとも径1m前後にはなるはずである。また、弥生社会において、集団内の共同体規制が個々の世帯の食生活にどの程度まで行われていたか具体的には不明ながら、分配を受けた食材を個々の世帯がそれぞれ単独の住居で自炊し食べたとは考えにくく、共同炊飯であったことはまず間違いない。ただ、その場合炊事小屋で合同の会食行為があったのか、煮炊きのみ共同で行い世帯ごとに分配を受けて住居内に持ち帰り食べたかどうかによって、炊事専用建物としての規模も問題になる。

以上の前提のもとに「長方形竪穴住居状遺構」を検証してみると、1期のI住4は床面の中央やや北寄りに1m²弱の長楕円形の範囲に焼土面をもち、II7住は床面の中央やや西寄りに0.7m²程の楕円形の焼土面をもつて、それぞれ焼上痕跡の規模の条件には当てはまる。また、2期のI建1は床面の中央やや西寄りに0.7m²程の楕円形の焼土面をもち、前二者とほぼ共通する。いっぽう、床面積は1期のI住4が7.2m²、II7住が12.1m²、2期のI建1が17.6m²を測り、1期の通常竪穴住居のI住3(中形)が12.6m²、II1住(大形)が36.3m²、2期のII9住(中形)が15.2m²、II3住(大形)が推定28.3m²を測ることから、1期の長方形遺構は通常の小、中形竪穴住居とほぼ同規模、2期は中形竪穴住居とほぼ同規模であったとみてよい。つまり、居住用の竪穴住居の平均的な構成員数は、中形住居で5人前後と推定されるが、これは1人当たり3m²前後の床面積を有したことになり、居住空間とは異なる共同の食堂と限定した場合でも1人当たり1m²は必要であり、単位集団の合同会食場としてはキッチン以外のダイニング部分が最低でも25m²は必要であったと思われる。

したがって、今のところ弥生時代中期に限っては、床面に1m²前後の焼土痕跡を残す長方形の竪穴住居状の遺構は、炊事小屋とする中山の説に賛同するものであり、さらに食事は世帯ごとに個々の竪穴住居が利用されたか、あるいは単位集団全員で集落の中で一番大きい竪穴住居、または未確認ではあるけれどもとくに夏場には炊事小屋に隣接した平地式の食事小屋(食堂)が利用されたと考えておきたい。

註

- (1) 中山俊紀・行田裕美「津市遺跡Ⅱ」「津市埋蔵文化財発掘調査報告」第8集 津市教育委員会 1981年
- (2) 河本清・中山俊紀他「大田二社遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告」第10集 津市教育委員会 1981年
- (3) 註1文献のまとめで、中山が通常竪穴住居と区別して使用している。
- (4) 中山俊紀「津市紫保井遺跡と中南小住居群」「古代古都」第15集 古代古都研究会 1993年
- (5) 横木忠司・柳瀬昭彦他「押入西遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」3 岡山県教育委員会 1973年
- 安川義史「押入西遺跡」「岡山県史」第18巻 考古史料 岡山県史編纂委員会 1986年
- (6) 註1文献のまとめで、中山が分析。

- (7) 近藤義郎・渋谷泰彦編「津山弥生住居遺跡の研究」津山市・津山郷土館 1957年
- (8) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻1号 考古学研究会 1959年 p.15
- (9) 註8文献 pp.13~14、および近藤義郎「弥生文化論」「日本歴史－原始および古代1－」岩波書店 1962年 pp.173~174
など。なお、この時の調査（1957年頃）では、竪穴住居は発見されていないと聞き及ぶ。
- (10) 註1文献 P.32
- (11) 註4文献 P.40
- (12) 註1文献 P.36

写 真 図 版



1 遺構検出状況 遠景（南南西上空から）〈左上に沼遺跡の復元住居〉

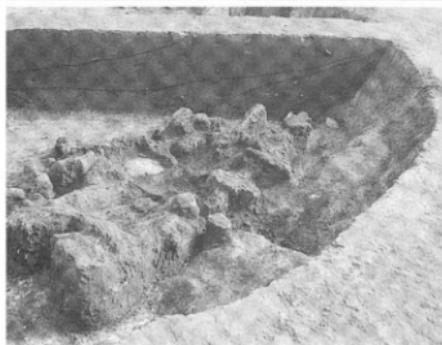


2 遺構配置 遠景（南西上空から）

図版 2



1 竪穴住居 1
床面検出状況
(南から)



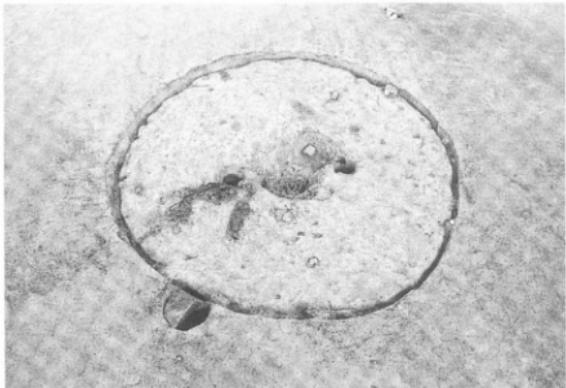
2 竪穴住居 1 床面炭化材 (西から)



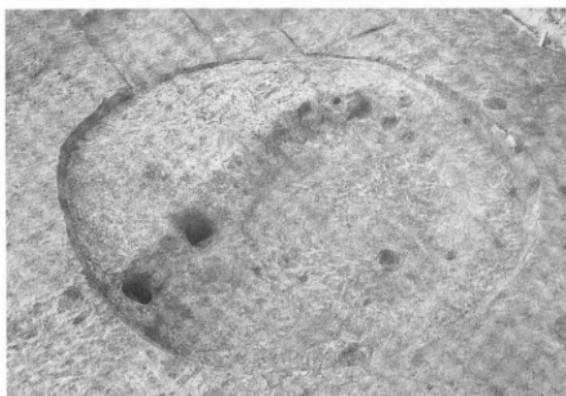
3 同 床面長頸壺出土状態
(北西から)



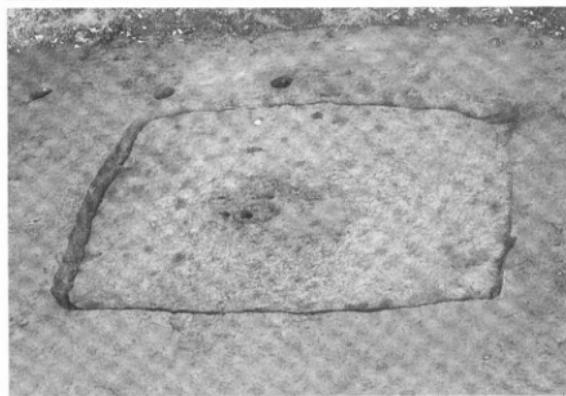
4 竪穴住居 1
床面精査作業風景
(南から)



1 穂穴住居 2
完掘状況（南から）



2 穂穴住居 3
完掘状況（東から）



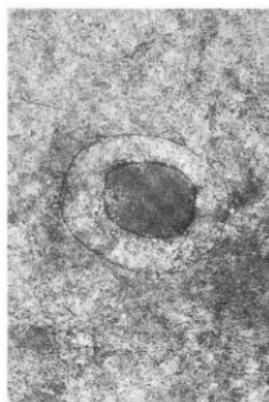
3 穂穴住居 4
完掘状況（西から）

図版 4

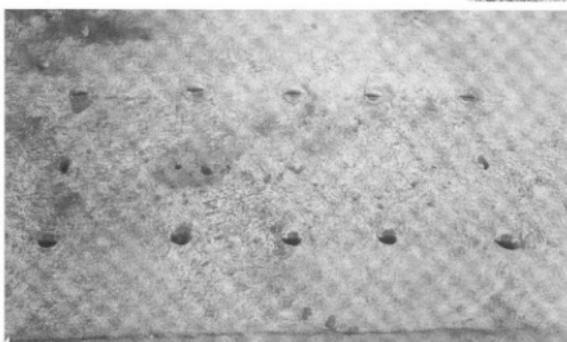


1 穫穴住居 4 床面遺物出土状態（西から）

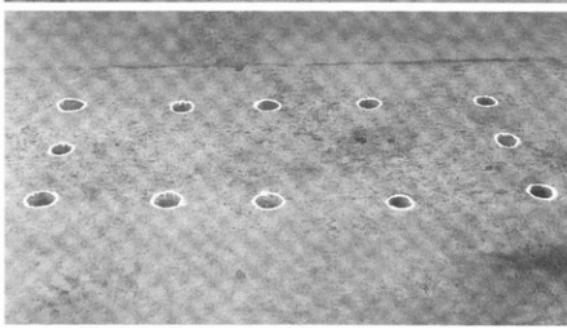
2 建物 I 柱穴 5 検出状況



(南から)

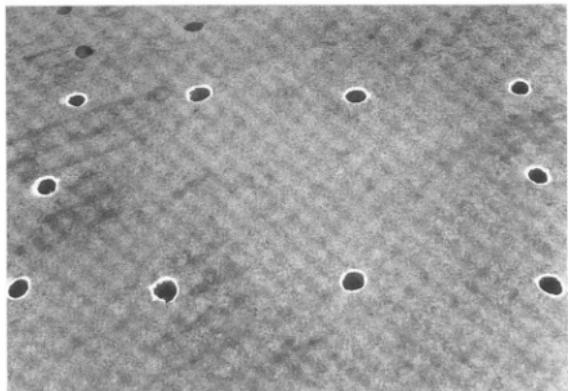


(南から)

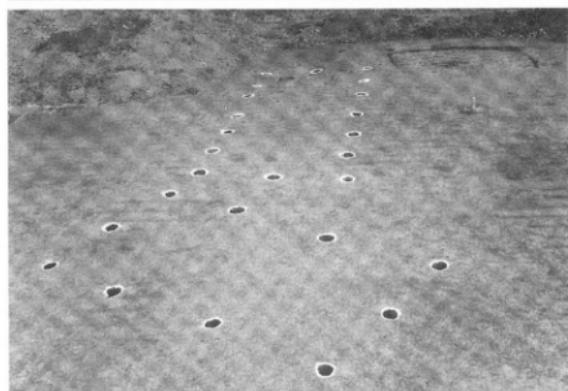


(北から)

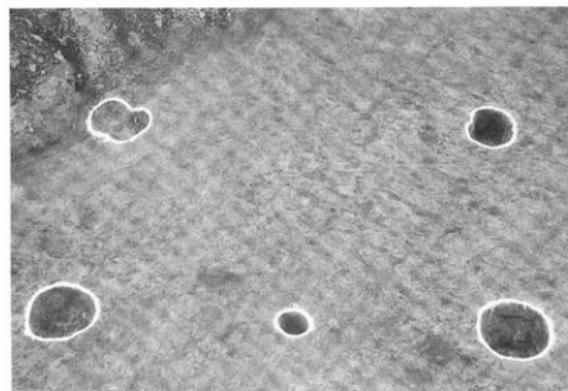
3 建物II 検出状況（上）、同 完掘状況（下）



1 建物II 完掘状況
(北西から)

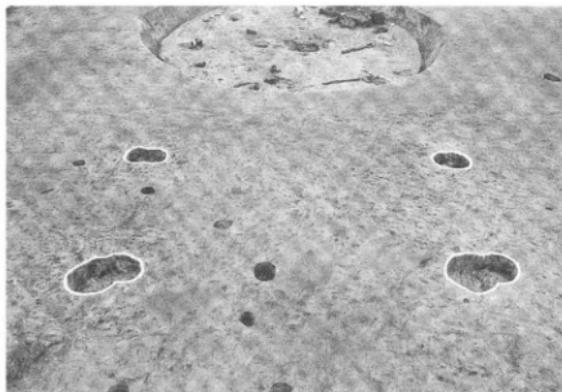


2 建物II・III
配置状況 (西から)

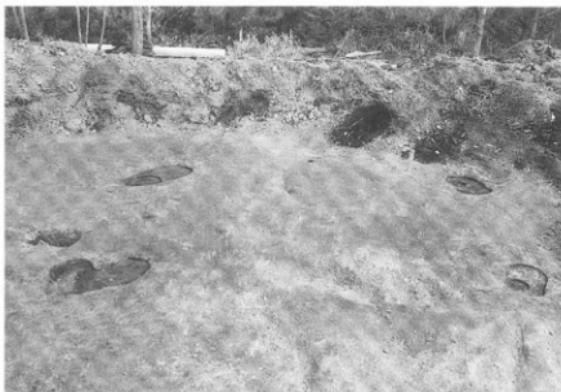


3 建物IV 完掘状況
(南東から)

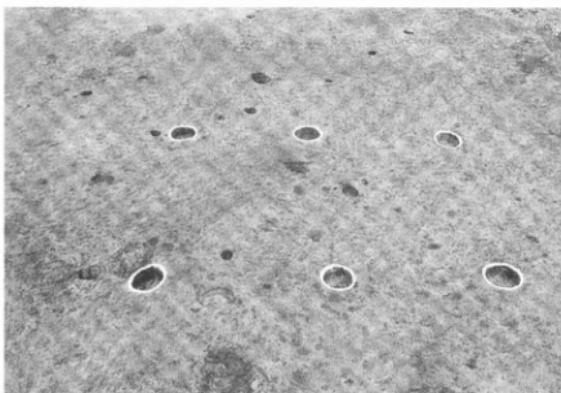
図版 6



1 建物V 完掘状況
(北から)
<奥は竪穴住居1>



2 建物VI 完掘状況
(西から)



3 建物VII 完掘状況
(南から)



6-7

6-1



6-2



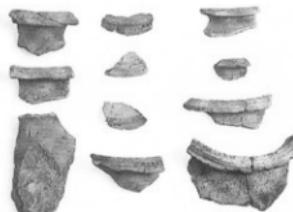
6-7
口縁拡大



6-3



6-4



6-5



6-6



6-9



6-16~20

図版 8



9-2



11-1~3



9-4



13-1~5



9-1・3



21-4



21-1~3

竪穴住居 2・3・4 出土土器、その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ぬまEいせき						
書名	沼E遺跡						
副書名							
卷次	I						
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第71集						
編集者名	河本 清 柳瀬昭彦 中山俊紀						
編集機関	津山市沼E遺跡発掘調査委員会(津山市教育委員会)						
所在地	津山市山北600-1						
発行年月日	平成13年10月25日						
ふりがな 所在遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 經 度	東 經 度	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
ぬま E いせき 沼 E 遺跡	おかやまけん つやまし 岡山県津山市 ぬま 沼610-5他	33203	35°04'50"	134°00'15"	1978.10.30 ~1979.1.6	1,400m ²	緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
沼E遺跡	集落遺跡	弥生時代中・後	竪穴住居址4 掘立柱建物7	弥生土器 石庖丁			

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第71集

沼 E 遺 跡

平成13年10月25日

編集 津山市沼E遺跡発掘調査委員会

発行 津山市教育委員会
岡山県津山市山北520番地

印刷 サンコー印刷㈱
岡山県総社市真壁871-2